

日韓古代木製食器の比較研究

－器種と樹種を中心に－

庄田 慎矢・韓志仙

- I. はじめに
- II. 研究の背景と目的
- III. 日韓古代木製食器の器種と樹種
- IV. 日韓の古代に特徴的な木製食器の事例とその背景
- V. おわりに

要 旨 近年の研究により、日本列島の古墳時代から古代にかけて、土器を中心とした調理具・食器において朝鮮半島からの大きな文化的影響があったことが明らかにされてきた。しかし、当時の食事の内容や作法を考えるうえでは、土製のみでなく木製食器に関する検討も不可欠と考える。近年の大韓民国における低湿地遺跡に対する発掘調査の増加は、こうした研究に絶好の機会を与えている。本稿では、近年蓄積された韓国出土木製食器の器種および樹種選択の傾向と、集成作業の進んだ日本出土のそれとを、紀元前2世紀頃から紀元後9世紀頃までの広い時期幅で比較し、両者の共通性と独自性を抽出しようと試みた。その結果、朝鮮半島南部においてみられる折板は日本列島にはみられず、日本列島においてみられる曲物容器や折敷、刳物桶は朝鮮半島にはほとんどみられないという排他的な状況を確認した。この違いは中国大陸からの文化的影響の濃淡や、在地の植生の違いに起因するものと考えられる。このように、木製食器の検討によって、従来は時代とともに増加する類似性が強調される傾向のあった日韓両国における古代の食膳形態について、両者の独自性も一層明確であることが明らかになった。

キーワード 木製食器 折板 曲物 古墳時代 飛鳥・奈良時代 三国時代 統一新羅時代

I. はじめに

21世紀の今日、大韓民国（以下、韓国と表記）と日本における食卓の風景は大きく異なっている（第1図）。その違いとは、具体的には、匙・箸を常に両用し基本的には器を手で持ち上げて食べない韓国に対し、日本では汁椀や飯碗を手にとり箸を用いたり直接器に口をつけたりして食べ物を口に運ぶという食べ方の違いや、韓国では副菜の大部分が共食されるのに対し、日本では銘々に分けられる傾向の強い点などに代表される。こういった違いがいつ頃から顕在化したのかは、少なくとも管見の限りはあまり明らかにされていない。むしろ、通時代的に考えるのであれば中近世の物質文化や絵画・文字史料が格好の研究材料となるが、本稿ではさらに遡った時代の物質文化を議論の題材とする。というのも、両者の違いは現在から数百年という単位ではなく、さらに遡ったところに淵源がある可能性が高いからである。例えば内山敏行¹によれば、日本列島における手持ち食器の成立は古墳時代中期の須恵器にまでさかのぼるといい、箸食への特化は9～10世紀頃に起こったと推定されている²。また、調理具や調理方法については、長胴甕・甑・備え付けカマドの組み合わせによる蒸し調理が中国大陸から朝鮮半島を経由して、古墳時代から古代の日本列島に広まっていった過程を筆者が旧稿で整理したところである³が、その受容の様相は地域はおろか集落によっても異なっていたことが指摘されている⁴。食器や調理具について、渡来系の要素だけでなく、在地系の要素がより詳細に検討されるようになってきているのである。

一方、これまでの研究は資料の制約上、どうしても土器を中心とした議論にならざるを得なかった。むしろ土器は食生活を考えるうえで格好の研究材料であることは論を俟たないが、木製食器の重要度もそれに劣らないことは、現在の我々の食卓から類推しても容易



第1図 現代の日本（左、2014年3月奈良県にて）と韓国（右、2011年5月江原道にて）の食卓の事例（筆者撮影）

に想像のつくところである。そこで本稿では、近年低湿地遺跡の発掘調査が進む韓国における出土木製食器の事例をとりあげ、それを日本の出土例と比較することにより、従来は土器を中心として論じられてきた朝鮮半島から日本列島への食器構成における影響について、別の角度から考察することを試みる。

ただし、細かな時期を追って議論を展開するには、いまだに韓国出土木製食器の資料数が十分ではないのが実情である。そこで、朝鮮半島中南部における初期鉄器時代から統一新羅時代まで、日本列島における弥生時代後期から平安時代初頭まで⁵、大まかには紀元前2世紀前後から紀元後9世紀前後までという極めて長い時期幅をひとまとめにし、大局的な視点から比較することによって、何らかの傾向を抽出することを目的とした。木器を研究対象とする以上、本来であれば木取りや製作技法についての議論も当然なされるべきであろうが、本稿では基礎的な研究として、おおまかな器種組成と樹種を検討対象とした。これらを合わせて扱う理由は、どのような樹種が容器に適した木材として選択されていたのかを知るためだけでなく、地域間での植生の違いと木製食器の違いを関連付けて議論するためである。また、こうした試みはこれまでなされてこなかったため、分析過程を通じて比較検討のためのさまざまな制約の存在も明らかになってきた。そこで本稿では、実際に比較研究を進めるうえでの制約が何であるのか、そしてそれを解消するためにどのような対策が考えられるのかについても言及する。

II. 研究の背景と目的

本稿は一千年あまりの時間幅を対象とするため、この期間における食事内容や食事作法の変化についての先行研究も膨大である。しかし、目的が大まかな比較研究にとどまることを考えれば、これらの研究史を網羅することはここでは特に必要でない。以下では、これまで特に集中して議論されてきた、古墳時代から古代の日本列島における食事様式の変化と朝鮮半島（および中国大陸）からの影響に対する評価をめぐる日韓両国での研究を振り返り、本稿の目的を明確にする。

日本古代における斉一的な土器製作の展開については、田中琢⁶がいち早く律令制の導入と関連付けて議論していたが、西弘海⁷によって、古墳時代から古代への土器の変化を「金属器指向型」と表現することや、法量の規格性に代表される土器群の特徴をとらえて「律令的土器様式」と呼ぶことなどが、新たに試みられた。そして、こうした土器にみられる変化は日本独自のものではなく、大陸からの影響が深く関係していることは、宇野隆夫⁸が明確に指摘した。

また韓国においても、朝鮮半島と日本列島の関係に着目した研究がなされた。権五栄⁹は、百済と高句麗の軍事的衝突を背景に百済からの多様な階級の移民が日本列島に渡来したこ

とを想定し、その結果として移動式カマドや大壁建物のような渡来系の文物が普及したとし、百済から日本列島への強い文化的影響を指摘した。鄭修鈺¹⁰は北部九州および畿内地域の炊事に用いられた土師器の形態や炊事痕跡を分析し、新羅・伽耶地域からの影響を認めつつもやはり百済からの影響が強いことを追認し、権の説を補完した。

一方、食膳方式については、山本孝文¹¹が、7世紀に中国の影響を受けた百済・新羅・日本において、対外的には中国の制度に対する従順さを、対内的には中央政権の権威を表現する外交上の必要性から、食器構成を含む生活・儀礼様式の変化があった、と指摘した。また、小田裕樹¹²は7世紀の飛鳥地域の土器にみられる台付・平底食器への転換について、山本同様に東アジアに共通する食事様式の受容を反映するとしたが、それと同時に須恵器と土師器の組み合わせに代表される、日本列島の食器構成における独自性も強調している。

以上を見ても明らかのように、食生活や食膳方式についての研究は、土器・土製品をその題材とすることが圧倒的に多く、木製食器についてはまだあまり研究が及んでいない。むしろ、木製食器の研究が皆無であったわけではない。例えば、金子裕之¹³が古代の漆器が律令体制下の身分秩序を具現化するものとして機能していたと指摘した研究や、鄭修鈺¹⁴が百済地域における高級化された木製食器の存在を指摘したり、轆轤の使用など製作技法上の変化を追跡したりした研究などは、先駆的なものである。また、中国との関わりを視野に入れ、弥生時代の木製食器を土器とともに検討した長友朋子¹⁵の研究も見逃せない。しかし、こういった少数の例外を除けば、木製食器に関する研究は極めて低調であった¹⁶。

一方、近年の韓国では低湿地遺跡に対する発掘調査が急増し、それにともなって木質遺物の検出数も急増している。韓国出土の木製食器は、現在筆者が把握している資料数だけでも400を超える。急増する資料に対する集合作業も進んでおり、『韓国の古代木器』（2008年、国立伽耶文化財研究所）、『新たな出会い 百済の木器』（2010年、国立公州博物館）、『韓国木器資料集Ⅰ - 農器具および工具編』（2012年、国立伽耶文化財研究所）、『咸安城山山城の木製遺物と活用』（2011年、国立伽耶文化財研究所）、『木、人そして文化』（2012年、国立伽耶文化財研究所・国立金海博物館）、『韓国木器資料集Ⅱ - 容器および生活具編』（2013年、国立伽耶文化財研究所）、『韓国木器資料集Ⅲ - 武器・儀礼具・その他』（2014年、国立伽耶文化財研究所）などの図書が続々と刊行されている。次章では、これらの集集成を適宜活用しながら、日韓出土木製食器の比較を試みる。

Ⅲ．日韓古代木製食器の器種と樹種

本章では、日韓両地域においてどのような種類の木製食器がどれだけの数みつかっており、それらはどのような木材によって製作されているのかを比較する。そのためには、まずは両国および各国内の地域間で統一した分類基準が必要であるが、これが容易ではない。

まず、器種名であるが、当然ながら報告者による分類名称が採用されるため、報告者が異なっている場合は分類基準が統一されていないことが多い。そこで本稿では、できるだけ大まかな分類に留めることで、混乱をさけようと試みた。椀と鉢を「椀・鉢」と一括りにしたのはもっとも極端な例である。資料が増えるほど統一した分類基準を適用するのが難しくなるのは当然であるが、できるだけ明確な基準による大分類の方法が模索される必要がある。

次に、樹種の分類名称が科なのか、属なのか、亜属なのか、あるいは種まで同定できているのか、明確に記載されていない場合が多い。中には木材組織解剖学上、現状では種まで同定することができないはずのものまで種レベルで記述されていることがある。また、韓国の報告書においてみられる「類」という用語（例えば「상수리나무류 (=クヌギ類)」)は、属や亜属の下位にあたり、種の上位にあたる分類概念のようであるが、日本では例えばアカガシ亜属に属する樹種を一括して「類」とすることがある¹⁷⁾ので、完全に同じ分類単位というわけではないようである。こうした混乱を整理するために、本稿では学名の表記および使用する日韓樹木名の対応表を提示（後述）することで、少なくとも本稿の中での混乱は避けられると考える。今後、日韓の研究者がより密に連絡を取り合い、共同研究を進めることでこうした概念の対応関係が徐々に整理されていくことを期待したい。

さて、日本の出土資料を扱った『木の考古学』¹⁸⁾では、本稿で扱う資料群を「容器 (6293件)」「調理加工具 (386件)」「食器具 (490件)」に、『韓国木器資料集Ⅱ』¹⁹⁾では「容器 (200件)」「漆器 (172件)」「食器具・調理具 (24件)」に分けている。前者においては細別器種について、容器を「椀」「皿」「鉢」「壺」「高杯」「槽」「盤」「箱」「底板・蓋板」「側板」「桶」「コップ形」「ジョッキ」「合子」「釣瓶」に、調理加工具を「杓子」「しゃもじ」「柄杓」「笊籠類」「搗粉木」「俎」に、食器具を「箸」「匙」「フォーク」「折敷」に分けている。後者においては統一した分類基準を設けておらず、報告書の記載に従っている。

本稿では、日本の資料の分類については可能な限り上記に従った。ただし、集計・比較作業の便宜上、判断基準が明確でない場合のある椀と鉢を同一分類に含める一方、底板・蓋板および側板を曲物とそれ以外に分けた。さらに上記の分類法に従って韓国の資料も再分類することにし、韓国の資料に該当するものがない場合に限り、新たな細別器種の項目を立てた（具体的には、「折板」「耳杯」の2細別器種）。韓国の資料については、上記文献において集成されたデータの他に、慶山林堂洞低湿地遺跡出土木器²⁰⁾を加えて検討した。同遺跡からは容器類が77点、炊事用具として杓子が7点報告されている。特筆すべきは、大多数の遺物に対して組織解剖学的樹種同定がおこなわれており、器種と樹種の対応関係を追うことが可能な点である。

第1表に示すのは、日韓における出土木製食器の器種および樹種である。しかし上記の

ように、日本における樹種同定の基準や記載方法は、必ずしも韓国のそれと一致しない。そこで、誤解をできるだけ避けるため、本稿で用いた樹種名についての対応表を第2表²¹に示す。この表は、森林総合研究所木材データベース²²やBG Plants 日本植物学名検索システム²³および各報告書を利用したほか、さまざまな方々からのご助言により作成したが、誤りがあれば全て筆者の責任である。むろん、植物の分類名は研究の進展とともに変化するし、訳語もこれに限られるものではない。この表はあくまで本稿が依拠する植物名の対応関係を提示するためのものであることを強調しておきたい。しかし同時に、こうした整理なしには、用材に関する議論自体が不可能なことは自明である。

さて、器種について表から読み取れることは、椀・鉢、皿、壺、高杯、槽、釣瓶などが日韓に共通してみられる反面、韓国に一定数みられる折板が日本にはなく、逆に曲物（折敷を含む）や刳物桶が韓国にほとんどみられない点である。林堂洞遺跡出土品の数を反映して韓国におけるコップ出土点数が多いことも目を引くが、資料の多寡についてはここでは評価が難しいので触れない。

次に、使用樹種については、上述のような分類学上の限界があるものの、それを踏まえたうえで、日韓に共通する樹種を抽出した。韓国側で樹種同定がおこなわれた資料数が143点と限られているのが現状ではあるが、それでも第1表右段に示したような、いくつかの共通する樹種選択を指摘できる。また、深めの挽物容器類に用いる樹種は日韓両国における現在の樹種選択と共通する部分が多い。筆者が現代の挽物製作における用材傾向を調査したところによれば、日本の輪島では挽物椀にはケヤキ・ミズメザクラを用い、加賀では挽物容器にケヤキ・トチノキ・ミズメザクラ・クリ・ヒノキを用いるという²⁴。これらの樹種は日本出土遺物にもみられる。また、韓国の南原では挽物容器にトネリコ、ケヤキ、ハンノキ、イチヨウなどを用い、アカマツを用いる場合と避ける場合がある²⁵。これに対応するものとして、ケヤキ属、ハンノキ属が韓国出土遺物にもみられる。

日本側の出土木器の木材として特徴的なスギ・ヒノキ・アスナロ属などの針葉樹が韓国のそれにみられないことは、木器における樹種選択が植生、すなわち入手可能な木材の実態を反映しているとみて良いであろう。第1表に明らかなように、これらの樹種を用いて製作されることの多い日本の曲物や折敷、刳物桶が韓国にみられないことは、次章に述べる韓国における植生の様相と整合的である。

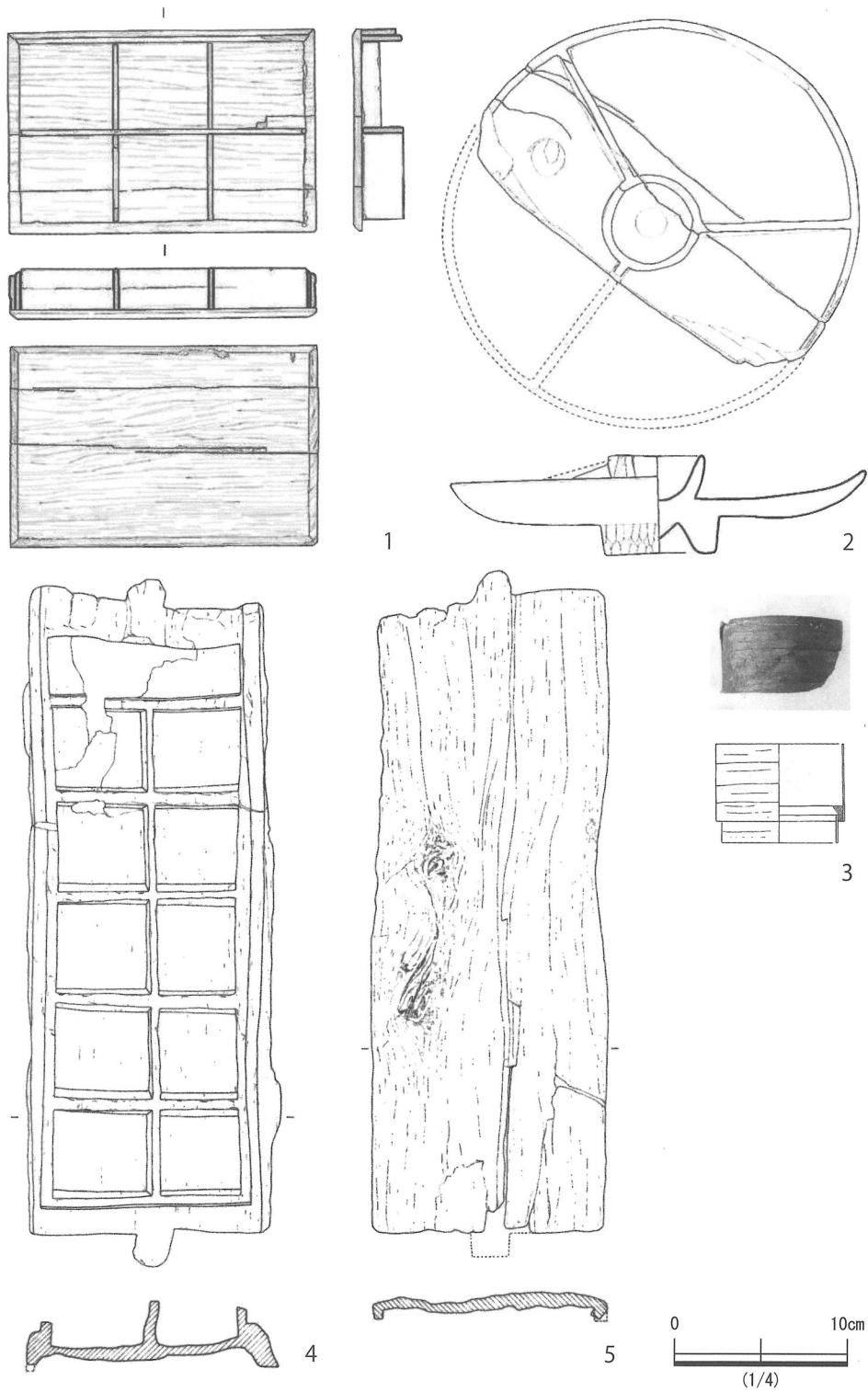
IV. 日韓の古代に特徴的な木製食器の事例とその背景

本章では、前章での比較によって浮き彫りになった、日韓それぞれに特徴的な器種について検討する。折板とは、日本では聞きなれない用語であるが、韓国語の発音をカタカナ表記するならば「ジョルパン」となるか。朝鮮時代の料理である「九折（節）板」に内

第1表 日韓出土土器の器種および樹種

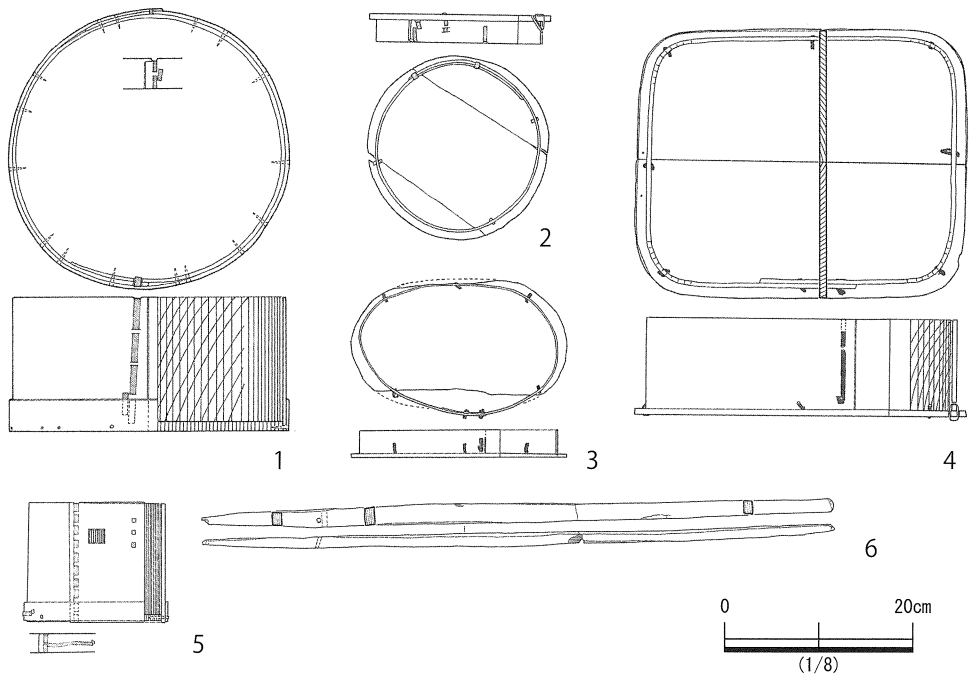
大分類	小分類	日本点数	日本樹種	韓国点数	韓国樹種	日韓で共通する樹種
容器	碗・鉢	307	アカガシ亜属、イヌガヤ属、イヌシテ節、エノキ属、カエデ属、カツラ属、カヤ、クスノキ、クスノキ科、クスギ節、クリ、クワ属、ケヤキ、コウヤマキ、サクラ属、シイ属、スギ、タブノキ属、ツバキ科、トチノキ、トネリコ属、ナナカマド属、ハリギリ、ハンノキ属、ヒノキ、ブナ属、マツ属、モクレン属、モミ属	91	エノキ類、オオヤマザクラ類(註1)、オニグルミ類、カバノキ類、ケヤキ属、クリ類、ニレ属、ノグルミ類、ハリギリ類、ハンノキ属、ヤナギ属、ヤマグワ類	エノキ属、サクラ属、ケヤキ属、クリ、ハリギリ、ハンノキ属
	皿	648	アカガシ亜属、イヌガヤ属、エノキ属、カエデ属、カツラ属、カヤ、キハダ、クスノキ、クスギ節、クリ、ケヤキ、ケンボナシ属、コナラ節、サカキ、サクラ属、サワラ、シイ属、スギ、タブノキ属、トチノキ、ニッケイ属、ニレ属、ニレ科、ハリギリ、ヒノキ、ヒノキ属、ヒノキ科、ブナ属、ムクロジ、モクレン属	34	オオヤマザクラ類(註1)、クリ類、ハリギリ、ハリギリ類、ハンノキ属、ハンノキ類、マサキ属、マツ類、ミズキ類、ヤナギ類	クリ、ハリギリ
	壺	8	クワ属、ケヤキ、サクラ属、ヒイラギ	3	ノグルミ	
	高杯	119	アカガシ亜属、アスナロ属、イヌガヤ属、カヤ、キハダ、クスノキ、クワ属、ケヤキ、サクラ属、スギ、トチノキ、ニレ属、ハンノキ属、ヒノキ、ヒノキ科、ユズリハ属	33	ケンボナシ、サクラ属、ニレ属、ノグルミ、ハンノキ属ハンノキ節	ハンノキ属
	槽	928	アカガシ亜属、アカメガシワ、アスナロ属、イヌガヤ属、エノキ属、オニグルミ、カジノキ属、カツラ属、カバノキ属、カヤ、キハダ、キリ、クスノキ、クスギ節、クリ、ケヤキ、ケンボナシ属、コウヤマキ、コナラ節、サカキ、サクラ属、サワラ、シイ属、シキミ、シヤシヤンゴ、スギ、タブノキ属、サシノキ属、ツガ属、ツバキ属、トチノキ、トネリコ属、ニッケイ属、ニレ属、ネズコ、ノグルミ、ハリギリ、ハンノキ属、ヒサカキ属、ヒノキ、ヒノキ属、ヒノキ科、マキ属、ムクノキ、ムクロジ、モクレン属、モミ属、ヤナギ属、ヤマナラシ属、ヤマモモ	52	カバノキ科、クリ類、クリ、クルミ科、クワ、ケヤキ属、ケヤキ、コナラ属(註2)、コナラ類(註2)、ニレ科、ノグルミ、ハンノキ属、ハンノキ節、マツ類(註3)、マツ(註3)、ヤナギ類	カバノキ科、クリ、ケヤキ、コナラ属、ニレ科、ハンノキ属、ヤナギ属
	盤	264	アカガシ亜属、アスナロ属、カヤ、キハダ、クスノキ、クリ、クワ属、ケヤキ、ケンボナシ属、コウヤマキ、コナラ属、サクラ属、シイ属、スギ、トチノキ、ネズコ、ヒノキ、ヒノキ属、ヒノキ科、ミズキ属、モクレン属、モミ属、ヤナギ属	2	オオヤマザクラ類(註1)、コナラ類(註2)	コナラ属
	箱	32	スギ、ヒノキ	2	不明	
	底板・蓋板(曲物)	2011	アカガシ亜属、アスナロ属、カヤ、クリ、ケヤキ、コウヤマキ、サクラ属、サワラ、スギ、トウヒ属、トチノキ、ヒノキ、ヒノキ属、ヒノキ科、モクレン属、モミ属	1	タケ?	
	容器	372	アカガシ亜属、アスナロ属、イヌガヤ属、エノキ属、クスノキ、クワ属、ケヤキ、スギ、ヒノキ、ヒノキ科、マキ属、モミ属	30	オオヤマザクラ類(註1)、キリ類、クリ類、ケヤキ、ケンボナシ、シナノキ、ニレ属、ノグルミ、マツ(註3)、ヤナギ(註4)、ヤマグワ類	ケヤキ
側板(曲物)	425	アスナロ属、カヤ、クスギ節、クリ、サワラ、スギ、トウヒ属、ネズコ、ヒノキ、ヒノキ属、ヒノキ科、マツ属、モミ属	1	タケ?		
側板(曲物以外)	118	アカガシ亜属、クスノキ、ケヤキ、サワラ、シイ属、スギ、ネズコ、ヒノキ、ヒノキ属、モミ属	0			
折板	0		11	キリ、バラ科サクラ属、ハンノキ属ハンノキ節、ハンノキ類、ヤナギ類、スギ属		
耳杯	0		1	不明		
桶	189	アスナロ属、イヌガヤ属、オニグルミ、カヤ、クスノキ、クリ、ケヤキ、サクラ属、サワラ、シイ属、スギ、タブノキ属、トチノキ、ネズコ、ハリギリ、ヒノキ、ヒノキ属、マキ属、モクレン属、ヤナギ属	0			
コップ形	14	イヌガヤ属、クワ属、ケヤキ、スギ、タケ亜科、ノグルミ、モミ属	41	クスノキ科、ケヤキ、ケンボナシ、ニレ科、ハンノキ属、ノグルミ、ヤナギ	ケヤキ、ノグルミ	
ジョッキ	12	イヌガヤ属、クワ属、スギ、トチノキ、ヤナギ属	7	ケンボナシ、ノグルミ、ハンノキ属		
合子	6	クスノキ、クワ属、ケヤキ、ツゲ、ヒノキ科	5	不明		
釣瓶	28	カエデ属、カヤ、キハダ、キリ、クスノキ、クスノキ科、サクラ属、シイ属、スギ、トチノキ、ヒノキ、マツ属、モミ属、ヤナギ属	25	マツ(註3)、ミズキ類	マツ属	
調理加工具	杓子	90	アカガシ亜属、アワビキ属、イヌガヤ属、ウリ科、キハダ、クスノキ、クスノキ科、クスギ節、クリ、クワ属、ケヤキ、コナラ属、コナラ節、サカキ、サワラ、シイ属、スギ、タブノキ属、ツバキ属、ツバキ科、ネズコ、ヒイラギ、ヒサカキ属、ヒノキ、ヒノキ属、ヒノキ科、ブナ属、モクレン属、モミ属	23	オオヤマザクラ類(註1)、キリ、クリ類、クワ類、ケヤキ類、ケンボナシ、ニレ属、ノグルミ、ヤナギ類、ハリギリ、ハンノキ属、ヤマナラシ(註5)	クリ、ケヤキ属
	しゃもじ	127	アカガシ亜属、サワラ、スギ、ヒノキ、ヒノキ属、ヒノキ科、モミ属、クスギ節	8	カバノキ属、クリ類、コナラ(註2)、ヤナギ属	
	柄杓	51	トネリコ属、スギ、サワラ、ヒノキ、アカガシ亜属、サカキ	0		
	箆籠類	68	ヒノキ、タケ亜科、テイカカズラ属、ヤナギ属、マタタビ属、イチイ科、イネ科、サクラ属、ムクロジ	0		
	描粉木	5	コナラ節、サカキ、ヒノキ属	0		
	俎	18	イヌガヤ属、スギ、ハリギリ、ヒノキ、モミ属	2	クリ、マツ(註3)	
食事具	箸	251+多数	カヤ、コウヤマキ、サクラ属、サワラ、スギ、タケ亜科、トウヒ属、トネリコ属、ヒノキ、ヒノキ属、ヒノキ科、マツ属、ムラサキシキブ属、モミ属、ヤナギ属	8	不明	
	匙	141	アカガシ亜属、イヌガヤ属、エノキ属、カエデ属、カヤ、クリ、クワ属、コウヤマキ、サカキ、スギ、ツバキ属、トチノキ、トネリコ属、ヒサカキ属、ヒノキ、ヒノキ属、ヒノキ科、マキ属、モミ属	10	エゴノキ類、フシノハアワビキ類(註6)	
	フォーク	1	スギ	0		
	折敷	59	アスナロ属、サクラ属、サワラ、スギ、ヒノキ、ヒノキ属、ヒノキ科、モミ属	0		

※註1 サクラ属を指す可能性が高い。
 ※註2 コナラ「類」とは、コナラ属のの一つ下の階級を指しているようであるが、コナラ節と同義であるかは不明。
 ※註3 マツ属を指すか？
 ※註4 ヤナギ属を指すか？
 ※註5 ヤマナラシ属を指すか？
 ※註6 アワビキ属を指すか？



第2図 韓国に特徴的な出土木製食器各種

1：双北里遺跡出土折板、スギ属、2：新昌洞遺跡出土折板、サクラ属、
3：皇南大塚南墳出土曲物、4・5：松峴洞出土折板、キリ（各報告書より）



第3図 日本に特徴的な出土木製食器各種

1:平城京出土円形曲物容器、2:藤原宮出土曲物蓋、3:吉田南遺跡出土楕円形曲物容器、4:平城宮出土長方形曲物容器、5・6:曲物柄杓(5と6は同一個体)、全てヒノキ(奈良国立文化財研究所『木器集成図録—近畿古代編—』1984年より転載)

部を九つに仕切った容器を用いたために、容器そのものもこう呼ぶようになったのが由来であるという²⁶。容器の内部に板などによる仕切りがあるものを指す(第2図)。削り貫きによって製作するものには円形(第2図-2)と方形(第2図-4)のものがあり、それとは別に板を組み合わせて製作するもの(第2図-1)もみられる。蓋および蓋を固定するための突起をとまう例もある(第2図-5・4)。蓋をする必要があったということは、調理場から食卓までがある程度離れていたことを暗示するとともに、大きさからは銘々皿でないことが想像されるので、さまざまな料理を盛り付けた華やかな宴席料理に用いられたのかもしれない。これらの使用樹種は刳物にはヤナギ類(属?)、キリ、ハンノキ属、サクラ属が用いられ、指物の事例は双北里の一例(第2図-1)しかないが、これにスギ属 Taxodiaceae が用いられている点は、韓国の事例としては極めて特殊である。また同例は漆塗りの精製品である。漆器の折板の事例としては、このほか天馬塚²⁷出土例がある。

このような、容器の内部に仕切りを作り出した事例は日本でもまれにみられる²⁸が、第2図に示したような、多数の空間に仕切る形態はみられない。これが何に由来するのかは、今後明らかにすべき課題である。ただし、中国における例として、安徽省鞍山市兩山郷三国呉朱然墓出土漆器「櫛」の事例があげられる²⁹ので、朝鮮半島中南部にみられて日本にみら

れない器種である折板は、木製食器における中国からの影響の濃淡で説明できる可能性がある。また、1点のみの出土であるが、慶州飾履塚出土の耳杯³⁰も中国からの影響が色濃い遺物といえる。もっとも、間を埋める資料が不足している現状では、十分な議論はできない。

反対に、日本に極めてよくみられるのに対し韓国ではほとんどみられない器種として、曲物・折敷・刳物桶があげられる。ここでは韓国側の研究者の注意を促すために曲物の事例を紹介する。日本出土の曲物には平面形に円形（第3図-1・2）・楕円形（第3図-3）・方形（第3図-4）があり、円形のものを利用した柄杓もみられる（第3図-5・6）。こうした曲物の多くはヒノキの板材を用いて製作される。基本的にこれらは韓国にはみられないが、唯一の例外として、慶州市皇南大塚南墳³¹出土の曲物（第2図-3）がある。根拠の提示はないが、報告によればこの曲物の材質は竹であるという。竹製の曲物は宮崎県の民具³²に事例があるが、対象時期の日本の出土遺物にはみられないことから、ここでも中国の漆器の可能性を考えておきたい。周知のように、日本の曲物は側板や底板にヒノキ・スギ・サワラ・アスナロ属などの針葉樹材を用い、ヤマザクラの樹皮などで綴じて作られる³³。これらの材の樹種は、韓国の出土木器にはみられない。刳物桶についても、同様の樹種選択の傾向を指摘できる（第1表参照）が、やはり韓国の出土木器にはみられない。なお、植生と器物の分布の関連については、山田昌久³⁴が平野スギの生育地帯に大型刳物容器が集中し、大型曲物容器はそうした植生分布を超えた出土例が少なくないとしている。このような視点に立って、それぞれの器種における樹種の制限要因の検討がおこなわれる必要がある。

また、樹種について比較する際に、それぞれの地域における植生、すなわち遺跡周辺で入手可能な樹木の種類に関する情報が必要である。入手可能であったのに用いなかったのかと、単に入手できなかったのかでは意味が異なるからである。一般的に、現代の韓国の山林においてはマツ属が優勢というイメージが強い。しかし、この現象が先史時代から継続していたわけではない。種実・木材・花粉の事例を検討した安承模の研究³⁵によれば、紀元後3～4世紀に朝鮮半島南部を中心に新石器時代以来優勢であったコナラ属が減少し、クリが増加して優勢になり、同時にマツ属やイネ科が増加する傾向を指摘している。一方、建築物に用いられた木材を先史時代から朝鮮時代まで検討した朴元圭らの研究³⁶では、新石器時代から三国時代まではコナラ属が多く用いられ、高麗時代になるとケヤキやアカマツがこれを上回るようになり、朝鮮時代にはほとんどがアカマツになるとした。なお、これらの樹種は全て木製食器にも用いられているので、それぞれの時代における比率がどうなのかを今後検討していく必要がある。

木器に用いられている樹種の組成を議論するためには、出土遺物に対する樹種の悉皆調査がおこなわれていることが前提となるが、そういった調査がおこなわれた遺跡はまだ多くない。そのため食器に限定して樹種の傾向を議論することにはあまり意味がないので、木

第2表 日韓植物名および学名の対応表

学名	和名	韓国名
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	アカガシ亜属	가시나무아속
<i>Mallotus japonicus</i> (L.f.) Müll.Arg.	アカメガシワ	에덕나무
<i>Thujaopsis</i>	アスナロ属	니한백류
<i>Ginkgo biloba</i>	イチョウ	은행나무
<i>Cephalotaxus</i>	イスガヤ属	개비자나무속
<i>Styrax</i>	エゴノキ属	매죽나무속
<i>Celtis</i>	エノキ属	팽나무속
<i>Prunus sargentii</i> Rehder	オオヤマザクラ	산벚나무
<i>Juglans mandshurica</i> var. <i>sachalinensis</i> / <i>Juglans mandshurica</i> Max.	オニグルミ	가래나무
<i>Broussonetia</i>	カジノキ属	닥나무속
<i>Cercidiphyllum</i>	カツラ属	계수나무속
<i>Betula</i>	カバノキ属	자작나무속
<i>Torreya nucifera</i> (L.) Siebold et Zucc.	カヤ	비자나무
<i>Phellodendron amurense</i> Rupr.	キハダ	황벽나무
<i>Paulownia tomentosa</i>	キリ	찰오동나무
<i>Cinnamomum camphora</i>	クスノキ	녹나무
<i>Cinnamomum</i>	クスノキ属	녹나무속
<i>Quercus section Cerris</i>	クスギ節	상수리나무류
<i>Castanea crenata</i> Siebold et Zucc.	クリ	밤나무
<i>Castanea</i>	クリ属	밤나무속
<i>Moraceae</i>	クワ科	뽕나무과
<i>Zelkova serrata</i> (Thunb.) Makino	ケヤキ	느티나무
<i>Zelkova</i>	ケヤキ属	느티나무속
<i>Hovenia</i>	ケンボナシ属	헛개나무속
<i>Sciadopitys verticillata</i> (Thunb.) Siebold et Zucc.	코우야마키	금송
<i>Quercus</i>	コナラ属	참나무속
<i>Quercus section Quercus</i>	コナラ節	졸참나무류
<i>Quercus subgenesis Quercus</i> / <i>Lepidobalanus</i>	コナラ亜属	참나무아속
<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	サカキ	비무기나무
<i>Cerasus</i>	サクラ属	벚나무속
<i>Chamaecyparis pisifera</i> (Siebold et Zucc.) Endl.	サワラ	화백
<i>Castanopsis</i>	シイ属	갯밭나무속
<i>Illicium anisatum</i> L. / <i>Illicium religiosum</i> S. et Z.	シキミ	벗순나무
<i>Tilia</i>	シナノキ属	피나무속
<i>Vaccinium bracteatum</i> Thunb.	シャヤンボ	모새나무
<i>Cryptomeria japonica</i> (L.f.) D.Don	スギ	삼나무
<i>Prunus</i>	サクラ属	벚나무속
<i>Machilus</i>	タブノキ属	후박나무속
<i>Aralia</i>	クラノキ属	두릅나무속
<i>Ehretia</i>	チシャノキ属	송알나무속
<i>Tsuga</i>	ツガ属	솔송나무속
<i>Camellia</i>	ツバキ属	차나무속
<i>Aesculus turbinata</i> Blume	トチノキ	철엽수
<i>Fraxinus</i>	トネリコ属	물푸레나무속
<i>Pyrus</i>	ナシ属	문배나무속
<i>Ulmus</i>	ニレ属	느릅나무속
<i>Thuja standishii</i> (Gordon) Carrière	ネズコ	-
<i>Platyacarya strobilacea</i> S. et Z.	ノグルミ	굴피나무
<i>Kalopanax septemlobus</i>	ハリギリ	울나무
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	오리나무속
<i>Eurya</i>	ヒサ카키属	사스레피나무속
<i>Osmanthus heterophyllus</i> (G.Don) P.S.Green	ヒイラギ	구글나무
<i>Chamaecyparis obtusa</i> (Siebold et Zucc.) Endl.	ヒノキ	편백
<i>Chamaecyparis</i>	ヒノキ属	편백나무속
<i>Cupressaceae</i>	ヒノキ科	측백나무과
<i>Meliosma oldhamii</i>	フシノハアワブキ	합다리나무
<i>Podocarpus</i>	マキ属	나한솔속
<i>Euonymus japonicus</i>	マサキ	사철나무
<i>Pinus</i>	マツ属	소나무속
<i>Cornus</i>	ミズキ属	중중나무속
<i>Aphananthe aspera</i> (Thunb.) Planch.	ムクノキ	푸조나무
<i>Sapindus mukorossi</i> Gaertn.	ムクロジ	무환자나무
<i>Magnolia</i>	モクレン属	목련나무속
<i>Abies</i>	モミ属	전나무속
<i>Salix</i>	ヤナギ属	버드나무속
<i>Morus bombycis</i> Koidz.	ヤマグワ	산뽕나무
<i>Populus</i>	ヤマナラシ属	사시나무속
<i>Morella rubra</i> Lour.	ヤマモモ	소귀나무

※-は朝鮮半島に自生しないため名称の無いもの

器全体について検討してみよう。これが可能な例として、筆者が直接関わった牙山葛梅里遺跡³⁷と、上で紹介した慶山林堂洞遺跡³⁸の事例がある。

紀元後3～4世紀に該当する葛梅里遺跡³⁹では、計359点についての樹種同定がおこなわれ、23分類群が認められた。用いられた主な樹種はコナラ属クヌギ節(35%)、クリ(23%)、コナラ属コナラ節(12%)、マツ属複雑管束亜属(10%)である。スギやヒノキはみられない。また、報告で指摘されているように、容器類6点のうち5点がハンノキ属ハンノキ節を用いている点は特徴的である。次に述べる林堂洞遺跡においてもハンノキ属は椀・鉢や高杯、コップ形容器などに一定量用いられているので、今後こうした用材の傾向が西日本とは異なる朝鮮半島側の特徴であるかどうかを見極める必要があるだろう。

同じく紀元後3～4世紀に該当する林堂洞遺跡⁴⁰では、計313点についての樹種同定がおこなわれ、24分類群が認められた。木器全体ではクヌギ節(25%)、ノグレルミ(18%)、マツ属(17%)、ハンノキ属(9%)が優勢であるが、漆器については特にハンノキ属(27%)やノグレルミ(25%)、ケンボナシ(20%)が比較的多く用いられている。ここでもやはり、スギやヒノキはみられない。同遺跡において、通常は漆器に用いられることの多い散孔材を用いずに、ノグレルミやケンボナシなどの環孔材を用いたのは、周辺の植生から入手可能な素材を選択したことに起因するものと推定されている。韓国での容器の用材傾向としては、林堂洞および葛梅里遺跡以外を集計すると、クリおよび「クリ類」、ハンノキ属、オオヤマザクラがいずれも15点で、1～4点しかみられない他の樹種を圧倒しており、ノグレルミやケンボナシを用いるのは少なくとも典型的ではない。なお、日本ではケンボナシを用いた容器は縄文時代に多くみられるが、本稿の対象時期にはほとんどみられない(6件)。ノグレルミを用いた容器は全時代を通じて極めて稀で4件しかなく、本稿の対象時期には2件しかみられない。

以上の2遺跡における様相は、新石器時代以来のブナ科優勢の森林から次第にクリやマツ属が増えて行く過渡期的な様相を示しているものと思われる。いいかえるならば、当然ではあるが、木器における樹種選択は当時の植生と対応関係にある。日本との比較という点では、スギやヒノキがみられないことも重要であろう。ただし、植生と木器の樹種との関係が通時的にどう変化したのかを詳細に検討するためには、今後の資料の増加を待つしかない。

V. おわりに

以上に見てきたように、木製食器の器種構成や樹種の選択傾向においては、日韓の共通性とともな独自性も鮮明になってきた。これは、中国大陸からの影響の濃淡に起因するとみられる特定器種の有無や、植生の違いに起因する入手可能な木材の差異のために生じた違いであった可能性が高い。こうした独自性ある木製食器が、小田⁴¹の指摘する土器におけ

る独自性とどう関わっているのか、そして中国式の食膳様式が重んじられたであろう外交の場面に登場したのかどうか、土製と木製の食器がどのような組み合わせで用いられていたのかなど、疑問は尽きない。今後の検討課題としたい。

もっとも、そういった議論を始める以前に、本稿はまさに比較研究の始まりの段階であって、時代ごとの変化の追跡や細かな地域間の関係の復元、製作技法と樹種選択の関連性など基礎的な研究課題は山積している。山本⁴²の指摘のように、朝鮮半島においては国家の領域によって土器の内容が大きく異なるという特徴がある。これに関しては、例えば本稿で注目した「折板」については、百済のものと伽耶のものでは明らかな差がある。木製食器全体で見たときにどれ程の差があるのか、今後検討を加えていきたい。

本稿を踏み台にして、今後の研究が進んでいくことを期待する。

謝 辞 本研究を遂行するにあたり、特に以下の方々、ご機関からのご協力を賜りました。記して感謝いたします（順不同、敬称略）。

荒山千恵、石川岳彦、石橋茂登、伊藤武士、浦蓉子、小田裕樹、垣地廣志、北濱幸作、小嶋芳孝、小林正史、佐々木由香、佐竹巧成、柴田慶信、柴田昌正、清水香、下濱貴子、隅堅正、津田幸信、中野咲、中野知幸、西出徹雄、能城修一、藤井裕之、藤木聡、三浦正人、村上由美子、望月精司、森岡健治、森本仙介、森本幹彦、山本孝文、金光烈、金周弘、박강용、박원동、宋智愛、安承模、安昭炫、양숙자、禹炳喆、尹淨賢、이광희、이영복、李明玉、李美淑、李義之、李亨満、鄭修鈺、鄭鍾兌、지성진、陳誠峻、車順喆、崔聖國、韓志仙、秋田城跡調査事務所、石狩市砂丘の風資料館、小松市埋蔵文化財センター、沙流川歴史館、セインズベリー日本藝術研究所、高鍋町歴史総合資料館、二風谷アイヌ文化博物館、羽咋市歴史民俗資料館、北海道立埋蔵文化財センター、原州伝統工芸研究所、原州漆文化センター、韓国考古環境研究所、錦江文化遺産研究院、国立公州博物館、国立大邱博物館、国立扶余博物館、国立扶余文化財研究所、忠清文化財研究院。

註

- 1 内山敏行「手持食器考」『HOMINIDS』1、1999年。
- 2 内山敏行「匙・箸の受容と食器の変化」『野州考古学論攷』中村紀男先生追悼論集刊行会、2009年。
- 3 庄田慎矢「蒸し調理伝来－東アジアと日本－」『文化財論叢Ⅳ』奈良文化財研究所、2012年。
- 4 中野咲・中久保辰夫「韓半島系土器のあり方からみた集落分類」『古代学研究』199、2013年。
- 5 このような時代区分に従っているため、当然、「日本」といっても、この場合日本列島全域を指すわけではない。
- 6 田中琢「C土器」『平城宮発掘調査概報Ⅱ』奈良国立文化財研究所、1962年。
- 7 西弘海「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会、1982年。
- 8 宇野隆夫「古墳時代中・後期における食器・調理法の革新－律令制的食器様式の確立過程－」『日本考古学』7、1999年。
- 9 権五栄「住居構造와 炊事文化를 통해 본 百濟系 移住民의 日本 畿内地域 定着과 그 意義」『韓国上古史学報』56、2007年。
- 10 鄭修鈺「韓半島 炊事文化가 古墳時代 日本에 미친 影響과 受容過程」『韓国上古史学報』76、2012年。
- 11 山本孝文「7世紀における土器様式の転換と東アジア」『史叢』81、2009年。
- 12 小田裕樹「食器構成からみた「律令的土器様式」の成立」『文化財論叢Ⅳ』奈良文化財研究所、2012年。
- 13 金子裕之「8・9世紀の漆器」『文化財論叢Ⅱ』同朋社出版、1995年。
- 14 鄭修鈺「古代 木製 食器의 組成과 特徵에 대한 檢討」『韓日文化財論集』Ⅱ、国立文化財研究所・奈良文化財研究所、2012年。
- 15 長友朋子『弥生時代土器生産の展開』六一書房、2013年。
- 16 韓国の木器の研究史については長友朋子が整理しているが、これをみても木器研究における関心は農具が中心になっており、木製「食器」について特別に関心が持たれている状況ではない。(長友朋子「韓国における木器研究の現状と課題」『木製品からみた古代の暮らし』島根県古代文化センター、2013年。)
- 17 伊藤隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料』31、1995年。
- 18 伊東隆夫・山田昌久編『木の考古学 出土木製品用材データベース』海青社、2012年。なお、これ以前の日本出土木製食器に関する集成資料に、『古代の木製食器：弥生期から平安期にかけての木製食器』（埋蔵文化財研究会、1996年）がある。
- 19 国立加耶文化財研究所 편『韓国 木器資料集Ⅱ』2013年。
- 20 朴升圭・河眞鎬・禹炳喆『慶山 林堂宅地開発事業地区（Ⅰ地区）内 慶山林堂洞低濕池遺蹟木器』嶺南文化財研究院、2014年。
- 21 検索のための便宜上日本語の五十音順に配列した。よって、配列順に植物学的な意味は全くない。
- 22 <http://treedb.ffpri.affrc.go.jp/>
- 23 http://bean.bio.chiba-u.jp/bgplants/ylist_main.html
- 24 2012年11月におこなった現地での聞き取り調査による。「ミズメザクラ」の正式な植物名は不明である。なお、本稿には直接関係ないが、輪島では箱物や曲物にはアスナロ、刳物にはホオノキを用いるという。
- 25 2013年7月におこなった現地での聞き取り調査による。
- 26 韓国民族文化大百科事典編集部 편『韓国民族文化大百科事典』웅진출판、1991年。
- 27 文化財公報部文化財管理局『天馬塚』1974年。

- 28 福岡市今宿五郎江遺跡からは内部を二つに仕切った浅い容器が複数出土している。福岡市教育委員会『福岡市 今宿五郎江遺跡Ⅱ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第238集、1991年、福岡市教育委員会『今宿五郎江9 - 第13次調査の報告 -』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1109集、2011年。
- 29 丁邦鈞「安徽马鞍山东吴朱然墓发掘简报」『文物』1983年第3期、1983年、p.9。
- 30 朝鮮総督府『大正十三年度古蹟調査報告 慶州金鈴塚飾履塚發掘調査報告』1932年。
- 31 文化財管理局文化財研究所『皇南大塚 - 慶州市 皇南洞 第98号 古墳 南墳 発掘調査 報告書 -』1994年。
- 32 2013年10月に高鍋町歴史総合資料館において実見した。
- 33 現代の例としては秋田県大館市の「曲げわっぱ」が良く知られている。
- 34 山田昌久「10章 総説 - 木材を使用した製品の豊富な種類 -」『木の考古学 出土木製品用材データベース』海青社、2012年、p.124。
- 35 安承模「植物遺体로 본 先史 古代 堅果類 利用의 变化 - 도토리·참나무와 밤·밤나무를 中心으로 -」『湖南考古學報』40、2012年。
- 36 박원규·이광희「우리나라 建築物에 사용된 木材 樹種의 變遷」『建築歴史研究』16-1、2007年。
- 37 李弘鍾·金武重·서현주·조은하·박성희·조진형·이우석·庄田愼矢·박상윤·안형기『牙山葛梅里 (3地域) 遺蹟』韓国考古環境研究所、2007年。
- 38 朴升圭·河眞鎬·禹炳喆『慶山 林堂宅地開發事業地区 (I地区) 内 慶山林堂洞低濕池遺蹟木器』(前掲註20)
- 39 能城修一·佐々木由香「葛梅里遺蹟 出土 木材 樹種分析」『牙山葛梅里 (3地域) 遺蹟』韓国考古環境研究所、2007年。
- 40 이광희「慶山 林堂I地区 低濕地遺蹟 木材遺物 保存處理 및 科學的 分析」『慶山 林堂宅地開發事業地区 (I地区) 内 慶山林堂洞低濕池遺蹟木器』嶺南文化財研究院、2014年。
- 41 小田裕樹「食器構成からみた「律令の土器様式」の成立」(前掲註12)
- 42 山本孝文「7世紀における土器様式の転換と東アジア」(前掲註11)

한일 고대 목제식기의 비교연구
-器種과 樹種을 중심으로-

庄田 慎矢·韓志仙 (쇼다 신야·한지선)

요 지 최근의 연구를 통해, 일본의 고분시대부터 고대에 걸쳐서 토기를 중심으로 한 조리구·식기가 한반도로부터의 큰 문화적 영향을 받았음이 밝혀져 왔다. 그러나 당시의 식사 내용이나 방법을 생각함에 있어서는 토제뿐만 아니라 목제식기에 관한 검토도 반드시 필요할 것으로 생각된다. 최근 한국 내 저습지유적에 대한 발굴조사의 증가는 이러한 연구에 절호의 기회를 제공해 주고 있다. 본고에서는 최근 축적된 한국 출토 목제식기의 기종 및 수종 선택의 경향과, 집대성 작업이 진행된 일본 출토품을 기원전 2세기경부터 기원후 9세기 무렵까지의 넓은 시기 폭으로 비교하고 양자의 공통성과 독자성을 추출하려는 시도하였다. 그 결과 한반도 남부에서 확인되는 折板 목제식기는 일본열도에서는 확인되지 않고 일본열도에서 자주 확인되는 曲物容器나 折敷, 도려내 제작한 통[刳物桶]은 한반도에서 거의 확인되지 않는다는 배타적인 상황을 확인하였다. 이 차이점은 중국대륙으로부터의 문화적 영향의 정도의 차이나, 재지의 식생의 차이에서 기원하는 것이라 생각된다. 이와 같이 목제식기의 검토를 통해 종래는 시대와 함께 증가하는 유사성이 강조되는 경향이 있었던 한일 양국의 고대 食膳 형태에 있어, 양자의 독자성 또한 더욱 명확하다는 점이 밝혀졌다.

주제어 : 목제 식기, 折板, 曲物, 고분시대, 아쓰카·나라시대, 삼국시대, 통일신라시대

Comparative Research on Ancient Japanese and Korean Wooden Tableware: Centering on Vessel Types and Wood Species

Shōda Shin'ya and Han Jiseon

Abstract: Based on recent research, from the Kofun into the Ancient periods of Japan, it has become clear that there was strong cultural influence from the Korean peninsula on cooking utensils and tableware centered on pottery. However, in considering the contents and manners of the cuisine of the time, examinations not only of ceramics but also of wooden tableware are considered indispensable. The recent increase in excavations of wetland sites in South Korea provides an ideal opportunity for such research. This contribution compares trends in the vessel types and wood species selections of recently accumulated data on wooden tableware recovered in South Korea, with those from Japan for which the work of compilation is more advanced, over the broad time period from around the second century BCE to the ninth century CE, and attempts to extract the elements of commonality and originality in both. As a result, a situation of mutual exclusion was confirmed in that *jeolpan* (compartmentalized containers) seen in the southern portion of the Korean peninsula are not found in Japan, while bent wood containers, wooden trays, and scooped out wooden buckets seen in Japan are nearly never encountered on the Korean peninsula. These discrepancies are thought to stem from variations in the strength of cultural influence from the Chinese mainland, and differences in the local flora. In this manner, through an examination of wooden tableware, it has become clear that with regard to the ancient form of the dinner setting for Japan and Korea, countries for which there has conventionally been a tendency to emphasize the similarities that increase over time, their separate idiosyncrasies also remain distinct.

Keywords: wooden tableware, *jeolpan*, bent wood containers, Kofun period, Asuka/Nara periods, Three Kingdoms period, Unified Silla period